

鉄兜団とナチズム運動の競合的共闘に関する一覚書

岩 崎 好 成

On the Stahlhelm's Competitive Joint Struggle with the Nazi Movement

Takashige IWASAKI

(Received September 2, 1999)

はじめに

小論は、鉄兜団 Stahlhelm, Bund der Frontsoldaten に関する若干の史料、具体的には、ワイマル共和国末期に同団地方組織によって刊行された対ナチ比較を旨とする小冊子二点と32年3月の大統領選に際し配布された同団の選挙ビラ・宣伝紙二点を手がかりに、鉄兜団員の自画像および対ナチズム運動観の一端を明らかにしようとするものである。その上で、まったく覚書の域を出ないのではあるが、鉄兜団とは何であったのか、同団の共和国政治史上の存在意義、とりわけナチズム運動の台頭に果たした役割について若干の考察をおこないたい。これは、筆者の、鉄兜団に Jungdo=青年ドイツ(騎士)団 Jungdeutscher Orden を加えた自立的「政治闘争団体 Politischer Kampfbund」研究、および、それを通じてのナチズム運動台頭研究の一部を構成する作業となる。

旧稿で筆者は、ナチ党が一躍国会内第二党の地位に進出した30年9月の国会選挙に際し、Jungdo が自らの反議会主義を捨てて付属政党を作り、それと民主党を合同させて新政党たる国家党を形成して選挙戦に臨んだ点に注目した。そして、その意味するところを、この時期、政党と政治闘争団体の両ファクターを兼ね備えた統合的政治運動が求められるに至っていたのであり、Jungdo と民主党は合体することによって、同種の運動体を既に形成していたナチズム運動に対抗しようとした、と捉えたのであった⁽¹⁾。また別稿では、次のようにも述べた⁽²⁾。

「政治闘争団体の性格を徹底させた SA (= 突撃隊) を擁したナチズム運動は、比較運動上まことに旧参戦者・旧(反)革命闘争従事者の政治文化に適合した政治運動であったと言える。时期的早さの点でも結合度の点でも傑出していたその統合運動性(ナチ党+SA+フューラー)こそ、ナチズム運動の『革命(=反共革新)』性を思想的にも運動的にも保証し、早期の現状変革を求める多くの人々にたいし、ひとつの有力な『魅力』となったのではなからうか。」

本小論は、このような視角・結論を継受・補完しようとするものである。したがって、ここでの筆者の関心は、ワイマル末期における鉄兜団の具体的活動如何にではなく、例えば上述の「旧参戦者・旧(反)革命闘争従事者の政治文化」、つまり、文民が旧フロントケンパー Frontkämpfer の眼で政治を見る、ということへの同団の関わり如何や、自立的政治闘争団体鉄兜団が、思想的親近性を示しつつ、ナチズム運動に競合的に併存していた点の意味如何を問うこ

とにある。

紹介する冊子について一言しておけば、そのひとつは⁽³⁾、支持されるべきは鉄兜団第一団長ゼルテ F.Seldte かナチ党党首ヒトラーかを問おうとしたもので、31年のクリスマスにヒルシュベルクで発行され、タイトルは『国民社会主義者か鉄兜団員か？ ゼルテかヒトラーか？ 国民社会主義運動最前線からのひとつの声』である。ヒルシュベルクはテューリンゲン地方とフランケン地方の境、チェコ国境にも近いザーレ河上流沿いにあり、この町を含むリーゼンゲビルゲ地域の鉄兜団地区指導者 Bezirksführer を務めるのが、筆者のフォン・ジード v.Sydow である。彼には元陸軍大尉という肩書きが付されている。

いまひとつの冊子は⁽⁴⁾、32年2月28日、シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン地方の町イツェホーで行われた講演記録で、『鉄兜団とナチ党。ゾルダーテントウム Soldatentum か議会主義か、少数者か大衆か？』と題されている。講演者は元海軍大尉フォン・ラメツァン＝シェーンモア H.v.Lamezan＝Schönmoor 男爵で、その地位は不明だが、ノルトマルクの領域区 Landesverband という鉄兜団の最大地方単位における指導者会議上の講演である。ちなみに32年1月の時点で鉄兜団員数は33万人弱、ノルトマルク領域区のメンバー数は1万2千人である⁽⁵⁾。

両冊子とともに、そのタイトルが示すように、自らとナチズム運動の異同を論じたものである。比較考察であるがゆえに、鉄兜団の譲れぬ一線が明確にされ、そこからナチズム運動が批判的に描かれることになる。しかしその一方で、両者はこの時期、提携関係に入っていたことが看過されてはならないだろう。フォン・ジード著の冊子が発行されるほぼ二カ月前の31年10月には、鉄兜団とナチズム運動は、フーゲンベルク A.Hugenberg 率いる国家人民党とともにいわゆるハルツブルク戦線を結成し、29年の反ヤング案国民請願・投票運動以来の共和国に反対する「国民的反対派」としての共闘を強化していた。したがって、そのナチ批判の矛先はある程度鈍らざるをえないが、他方、相互に自立した政治運動の競合的共闘であるがゆえに、主導権争いの観点から言っても、鉄兜団は自らの政党とは異なる政治闘争団体としての個性、優位性、そしてその根拠等を鮮明にしようとするだろう。その点、ならびに共闘を可能にする思想的同質性を両冊子から読み取ればと思う。

フォン・ラメツァン＝シェーンモア男爵の講演がなされた半月後には共和国大統領選があり、鉄兜団は第二団長デュースタベルク Th.Duesterberg を立候補させた。その際の選挙宣伝ビラ・宣伝紙各一点を紹介・検討してみようとするのは、そのうちの『デュースタベルクの政治』⁽⁶⁾ が両小冊子以上に凝縮された形で鉄兜団の自画像を描いているように思われるからである。自らの政党化も図らなければ既成政党の付属組織になるつもりもない自立的政治闘争団体たる鉄兜団が政治的影響力を直接行使しうるのは、院外の変革手段である国民請願・投票制度と大統領選挙であろう。前者については、実際に鉄兜団はヤング案への反対(29年)、プロイセン邦議会の解散要求(31年)という形で運動化を促進(——結果は失敗)したが、これらは個別テーマに関わるものである。一方、大統領選は団の主張を全面展開できる場であり、そのビラは単刀直入に自己を語るのではなかろうか。

紹介するいま一点、ブラウンシュヴァイク領域区機関紙『若き国民』11号上に掲載されている一連の選挙スローガンは、同じ「国民的反対派」の候補者ヒトラーとデュースタベルクを対

比するものである⁽⁷⁾。それは小冊子同様、競合的共闘のあり様を指し示すものになっているが、同時に、共和国末期に鉄兜団がたどり着いた一応の思想的到達点、運動的位置を短い言葉のうちに語っているように思われる。そこで以下、まずは、「決定せよ！」との見出しをもつこの対比的選挙スローガンから紹介してみることにしたい。

1. 「決定せよ！」

紙面では、ヒトラー支持、デュースタベルク支持の意味するところが対照表的に掲載されているのだが、ここでは便宜上番号を付して、それぞれを一括して示すことにする。なお⑧のみ別頁上のものである。

- ①君はナショナルボルシェヴィキ政党の独裁を欲するか。ならばヒトラーに投票せよ（——以下、「ならばヒトラーに投票せよ」は省略）
- ②君はナショナルボルシェヴィキの思潮に貫かれた一政党の利益のために、すべての信頼するに足る国民主義的組織・政党を意図的に粉砕することを欲するか。
- ③君は（中央党・社会民主党の）黒赤のボス支配経済 schwarze Bonzenwirtschaft を国民社会主義的なそれで代替せんことを望むのか。
- ④君はドイツの将来や統一を、ゲッベルス博士の如き煽動的な功名心狂い達の飽くことなき権力欲の犠牲となすことを欲するか。
- ⑤君はナチズムにおけるナショナルボルシェヴィズムの強化を欲するのか。
- ⑥君は単独でドイツを救済しようと主張する天才なるものを信ずるか。君は妄想、奇跡の類を信ずるのか。
- ⑦君が社会主義的約束の煽り立てとその不履行をもって、国民主義的意志を再び破壊せんとするのなら、ヒトラーに投票せよ。
- ⑧節度なき国民社会主義的政党独裁を欲するなら、ヒトラーに投票せよ。

以下は、デュースタベルク支持を訴えるスローガンである。

- ①君は有機的な国家構築を欲するか。ならばデュースタベルクに投票せよ。
- ②君は解放のためにドイツのすべての国民主義勢力の統一を欲するか。
- ③君は責任ある地位に専門家が就くことを欲するか。
- ④君は鉄兜団・SA・SS（＝親衛隊）のナショナリスト達が協力して、ドイツの解放を闘い取ることを欲するか。
- ⑤君はナチズムを正しい方向に向かわせたいか。
- ⑥君はドイツは大きな犠牲の下、すべての者の共同を通じてのみ解放されると思うか。
- ⑦君が危険で得るところのない価値低き者達の強欲への迎合を良しとせず、犠牲と業績の前線ナショナリズムを欲するならば、デュースタベルクに投票せよ。
- ⑧ナショナリズムの第三帝国を欲する者はデュースタベルクに投票せよ。

以上から幾つかのことが明らかになる。第一に、鉄兜団の（この時期可能なものとして残されていた）対ナチ批判の中身は、①⑧に示されるように、ナチ党が一政党独裁を志向していることと、①②で主張されているように、ナチズムとは要するにナショナルボルシェヴィズムの

謂に他ならず、ということである。

留意すべきは、前者に関し鉄兜団が否定しているのは政党の独裁であって、独裁一般ではないことであろう。フォン・ジードが著した冊子においても、「戦後歴代首相のうち国民主義的運動にとって最も危険なブリューニング首相」という行があるが、それは、大統領内閣そのものが「危険」なのではなく、むしろその純化を阻む議会主義的痕跡がブリューニング内閣に濃厚に残っている点を問題視しているのである。すなわち、「大統領の緊急命令（による立法）という形で民主主義システムの欠陥を巧妙に隠蔽しているがゆえに」、かえって「危険」というわけである⁽⁸⁾。ちなみに、同じような大統領内閣肯定・ブリューニング内閣否定は Jungdo にも見られ、そこでは、「48条による新しい統治は実際、ドイツ内政の浄化のためには必要である」が、ブリューニング内閣のそれは、「旧ブルジョワ諸政党が自己の権力を独裁的に主張せんとする最後の試み」と述べられていた⁽⁹⁾。が結局、Jungdo の方は、自ら付属政党を形成し民主党との合同を図る中道穏健的立場を選択することによって、独裁そのものも否定することになる。他方、鉄兜団の方は、Jungdo から「彼らは皆独裁をやかましく要求する。皆それぞれが別々の独裁を狙っている」と攻撃された「国民的反対派」形成の途を選択し、しかし、ナチ党や国家人民党単独の「別の独裁」は否定していたわけである⁽¹⁰⁾。

対ナチ批判の後者すなわちナショナルボルシェヴィズムとの同一視は、鉄兜団のマルクス主義的「経済的社会主義」への嫌悪を示すものである。要するに、ナチズムの行く末にソ連型社会主義への途の危険を見出しているのである。フォン・ラメツァン＝シェーンモーア男爵の講演においても、次のような一節がある⁽¹¹⁾。

「スターリンは(レーニンの)世界社会主義への尽力を一種のロシア国民社会主義へと改変したが、しかし、彼はすぐさま、ある民族が(「各々にそれ相応のものを」ではなくして)「各々に同等のものを」という原理に従った国民社会主義的基盤上に生存を図るのは無理であることを認識した。彼は多様な賃金、つまり業績に応じた賃金体系を導入した。国民社会主義から一種のナショナルな国家資本主義 Staatskapitalismus になった。つまり、ただ国家のみが資本と生産手段を自由処理しうようになったのである。ロシアの生存意志がいつれ、ナショナルな個人資本主義 Privatkapitalismus、生産手段の所有を含めた私的所有権を認めることになるのは疑いのないところである。なぜなら、唯一相続財産こそが文化的民族における家族の基盤たりうるものであり、国民経済上も、個人のイニシアティブの方が国家官僚制などよりはるかに民族に寄与するからである。」

このあたりが、その帝政復古志向と相まって、鉄兜団を即“ファシズム運動”と見ることを躊躇させる同団の非革新性＝“保守反動”性ということになるだろうが、しかし、④⑤に示されるように、その対ナチ批判はすぐ腰砕けになる。

これはある意味では正当とも言える対ナチ観察であるが、鉄兜団は、ナチズム運動がすべてナショナルボルシェヴィキの潮流におおわれているとは見ていない。そのような潮流は「ゲッベルス博士の如き」に代表されるのであって、必ずしもヒトラーをそうとは見ていない。ヒトラーが社会主義とナショナリズムを同一視していたことは周知のところであるが、後述するように、男爵の講演もまた、社会主義を「ひとつの純粋に倫理的な概念」と捉えれば、それはナ

シヨナリズムと「完全に重なり合う」とするのであった。したがって、スローガンの言葉を利用すれば、「鉄兜団・SA・SSのナシヨナリスト達が協力」すれば、「ナチズムにおけるナシヨナルボルシェヴィズムの強化」は防ぎうるものであり、鉄兜団の影響力をもってすれば、「ナチズムを正しい方向に向かわしめ」うるものであった。この点に筆者は、やや先走りになるが、両者の反マルクス主義的国民統合（志向）という機能的（思想的）同質性と、そこから逸脱しかねないナチズム運動のポピュリズム性を制御する存在としての鉄兜団という自己規定、が見られると考えるものである。

と同時に、それと並んでここで重要なことは、「鉄兜団・SA・SS」という言い回しであろう。ゲッベルス批判を政党政治家一般への批判と重ね合わせるためとはいえ、SSを含めてSAを鉄兜団と同列に扱ってしまっている点が興味深い。既に、例えば30年9月選挙のナチ党勝利に際し次のように述べていた如く、鉄兜団としては、政党ファクターと政治闘争団体ファクターの結合の成就をナチズム運動に見ることは脅威であり、それを否定するためには、SAを決して鉄兜団と同等の政治闘争団体扱いしてはならないはずだからである。

「ナチスは、同時に国防団体（——政治闘争団体と同義・・・筆者）と政党であることの難しさについて曖昧にはできないだろう。騎士十字の旗を、よりもよって民主党のダビデの星に供した・・・マーラウン氏率いる Jungdo は、政党として活動する国防団体は政党として終わる、ということを実証してみせた。」⁽¹²⁾

また、フォン・ジードの小冊子では、以下のように述べられている⁽¹³⁾。

「SAについて述べる時、私は戦友のハインツHeinz がその著『爆薬 Spreng = Stoff』で次のように言っていたことを思い出す・・・。「ひとつの兵士運動の頂点に議会人を置いた場合、それは集会警備部隊、党警察になってしまうのであり、必要な時には巧言で取り込まれるが、その後は隅に置かれるのである」。SAの犠牲上に成長しているシュテンネスW.Stennes、シュトラサーO.Straber 等（ナチ党離脱者）指導の黒色戦線 Schwarze Front の存在は、兵士的なものと議会主義的なものととの混合の帰結を示す現象である。」

「必要な時には」以下は、あたかも第三帝国におけるSAの行く末を暗示するが如き言葉になっていて興味深い。要するに、フォン・ジードにとってSAはナチ党の護衛部隊であって鉄兜団の如き政治闘争団体ではなく、もしSAに後者の要素があったとすれば、それはヒトラーの議会主義路線を批判して反乱・脱党していった東部ドイツSA指導者代理シュテンネス等のグループを指す、ということであろう。

ところが、このフォン・ジードもまた、別の箇所では、「ナチ党は・・・SAにおいても、鉄兜団の行進大隊と同様に、必要とあらば身命を賭して常に最善を尽くす若者を有している」と、同列扱いをしている⁽¹⁴⁾。要するに、29/30年を境に、もはや党護衛部隊に矮小化することは不可能な存在にSAは成長していたのであり、言わば、「国民的反対派」においてナチズム運動は一個で政党＝国家人民党と政治闘争団体＝鉄兜団に拮抗していたことを、これは指し示すだろう。

2. 「デュースタベルクの政治」

とすれば、鉄兜団はますます、純然たる政治闘争団体であるがゆえの自らの存在価値、および政党というファクターに含まれるマイナス性を強弁せざるをえない。そのあたりを、大統領選時のビラ「デュースタベルクの政治」はどう述べているのだろうか。以下に引用するのはその冒頭部分である。

「不毛にして反動的な心性だけが、政治は政党によってのみ担われうるなどと主張する。政党はその名称・本質からして非ドイツ的である。それは、ドイツの民族性に潜むあらゆる分離的分解的特性をかきたてる。我々の墮落はそこに発するのである。デュースタベルクはこのことをはるか以前から認識してきた。それゆえ彼は、鉄兜団に決定的な影響力を及ぼしてきた。鉄兜団という『新しい時代の政治的表現形態たる政治闘争団体』において提示されるのは、デュースタベルクの政治は国家政治 Nationalpolitik なり、ということだ。」

では、「国家政治」とは何か。

「デュースタベルクの国家政治の基盤は、我が民族に天賦のもの、それゆえ永遠に有効性をもつものへの彼独特の畏敬の念である。・・・デュースタベルクの国家政治は、カーstens 的排他心に対し指導者の誠実 Führertreue を、国家への反逆心に対し仲間への誠実 Mannestreue を、利己に対し無私 Selbstlosigkeit を、階級憎悪に対し戦友愛 Kameradschaft を、すべての間の闘争に対し犠牲心 Aufopferung を対置する。」

そして、このような「最良の生粋のドイツ的心性」を鉄兜団は体現しているがゆえに、そこには、「利害政治上、政党政治上の吹けば飛ぶような問題下の、邪悪な精神の持ち主間の卑小な争いなどない」として、次のように続けられる。

「デュースタベルクは言う。鉄兜団は政党ではなく、いかなる政党にも奉仕しないし依存もしない。鉄兜団が知るのはただドイツという名の政党のみ。それゆえ鉄兜団は、諸政党がその支持者や同調者を麻痺させるために使用する手立てやハツタリなど持つことはない。・・・我々は、大衆妄想、人気取り、劇場芸をドイツの本質に一致しないものとして軽蔑する。それゆえ何らかの約束を通して人々のさもししい心に訴えようなどとはしない。ただ自分のために、自らの虚栄、政治的野心、栄達のために働く者など我々の隊列にはいない。団員は無私にして謙虚である。それゆえ、政党という偶像にへりくだることもなければ盲従することもないのである。」

これらは先に紹介したナチ批判のスローガンの④⑥⑦と呼応するものをもっているが、対ナチ比較冊子において皮肉裡に称賛されるのもナチズム運動の政党としての部分、大衆にたいするデマゴギー能力の保持に対してである。フォン・ジードは、「いかなる批判もヒトラーの功績を減ずることはできないが、他の誰よりも彼が成功をおさめた点は、選挙に際しドイツの市民層をたたき起こしたこと」と述べ、次のようにも言う⁽¹⁵⁾。

「ナチ党は(ドイツの)瓦解以来、最も一貫してひとつの明白な解放政策を追求してきた政党である。同党は今日、フーゲンベルクによって純化された国家人民党とともに、議会における最も先鋭的な議会主義反対者である。同党は鉄兜団に比して・・・政党としての大きな利点をもっている。それは何よりも同党が、一群の手当て付き演説家を地

方に派遣でき、それを通して鉄兜団を上回る煽動性をもっていることに存する。」

男爵もまた、次のように言う⁽¹⁶⁾。

「ナチ党が多くの特長で鉄兜団よりすぐれていることは疑いない。とりわけ、ヒトラーは、大衆が熱狂するに違いない諸々の理念に大衆を注目させることを完璧に心得てきた。彼はまた、これらの理念を聴衆ごとに合わせて造形し、その途方もない演説家としての才能でもって印象深く伝えることを心得ており、その結果、すべての者が伝えられた思想を自分自身に発する思想であると信ずるほどである。・・・ナチ党の勝利はプロパガンダにもとづいている。」

ところで、「指導者と部下（仲間）との間の、またそれぞれの間の誠実、無私、戦友愛、犠牲心」を、鉄兜団は「我が民族に天賦のもの」「生粋のドイツの心性」と言うのであるが、それを実際に鉄兜団が会得したのは何時か。会得しえたのは何故か。「戦友愛」という言葉がそれを指し示す。彼らにとって、第一次大戦の体験こそがすべての出発点となる。デュースタベルク自身の「指導者の誠実」「犠牲心」についても、ピラでは次のように語られていた。

「デュースタベルクは1914年秋、彼の大隊のために、遺族の窮乏緩和を目的に7か月2万5千マルクが支払われることになる葬祭保険基金Sterbekasseを設置した時、社会的な精神における指導者の誠実を指し示した。」「デュースタベルクは1914年秋のアベルン侵攻に際し、大隊の先頭に立って負傷したことを通して最高度の犠牲心能力を指し示した。」

ここに、戦後革命期の内戦経験や国境防衛戦経験を含めた大戦参戦経験、つまり旧フロントケンパーとしての経験が、鉄兜団の思想の根底にあることが示される。それは、彼らが自らの優位性を語る際の根拠ともなる。これを対ナチ比較冊子の著者はどう語るのだろうか。

3. 「ゼルテかヒトラーか」

フォン・ジードは自負の念を込めて言う⁽¹⁷⁾。

「我々前線兵士、すなわち塹壕から生まれた新しい世界観を故郷に持ち帰り、それを何年かの人生経験を通して十全化した我々に、今日、20、30代の若造のナチ指導者が、ドイツ国民はいかなる世界観をもつべきか、などとほざくのは笑止千万である。」

では、「塹壕から生まれた新しい世界観」とは何か。彼はまず、第一次大戦前のドイツを功罪両面から把握する。

「ドイツは裕福な国であり衣食足り、したがって大衆は満足していた。あらゆる社会層は当時勤勉であり、我々には地域的余裕 Raum も仕事もあった。陽光が十分当たらぬ者はアフリカ植民地に向かった。・・・国家指導は引き締まった純粋にプロイセン的なものであり、それはあらゆる階層・身分の上に立っていた。ドイツ皇帝は声望ある世界的指導者であった。」「(が、しかし、) 戦前の諸身分は階層・称号・財産・教養の巨大な壁によって鋭く隔てられていた。・・・非常に高慢な上層階層は実利主義的 materialistisch で、ドイツ魂を次第に失っていった。上層よりも民族性に根ざしていた中間層においても、実利主義が広範に進展した。」

「そこに戦争が勃発した」とフォン・ジードは続ける。

「ドイツの婦人は労働者層も市民層もともに並んで、軍隊を積み込む駅頭に誇りの涙を浮かべて立った。・・・やがて、評判悪き片眼鏡の少尉と並んで労働者が名誉の戦場に倒れた。死の前には財産も教養も爵位も、不作法も中傷も称号も、地位も身分も大した意味はなかった。死は無慈悲に4年半の間荒れ狂った。心のしっかりしている奴だけが一角の者と見なされた。ひとつの新しい偉大な世界観が、フランスの弾孔多き地区や他の激戦地で成長した、すなわち鉄兜団理念が。・・・その隊列において鉄兜団は、ドイツ国民に本物の民族共同体の範を示し、そして、この民族共同体が民族全体にとって自明となることを欲するのである。」

最後にフォン・ジードは言う。

「我々はその心魂や勇気のなかに人物を見るのであり、眼前にあるすべての人々にたいする我々の第一の問いは、『過酷であった1914-1918年当時、君はいかに振る舞ったか』である。義務を果たした男こそは、名前がどうであれどこで働こうと、我々の敬意を得るのである。そして第二の問いはこうである。『18年11月の大汚辱以来、君はどこに立っていたのか』。君が、自分はいかにしてドイツの解放を支援するか、との考えで日々苦しんでいるのであれば、君は緑灰色の解放部隊(＝鉄兜団)に属すべきである。』⁽¹⁸⁾

第一の問いへの回答から帰結さるべき塹壕共同体思想＝民族共同体思想を、共和国の生成・展開に際し保持し続けてきたのは誰か、が第二の問いの意味するところであろうが、ここから、フォン・ジードのナチズム運動に対する第二、第三の自負が生ずる。彼に言わせれば、「ナチ党には鉄兜団の人材に匹敵するほどのものはな」く、その証拠に、今日鉤十字のバッジを付けている若者はかつて、「まだ街頭に政治闘争団体のメンバーとして出て行くことが危険であったがゆえに、鉄兜団に入団する勇気をもたなかった」者ばかりである。「これについては同党に責はないのであって」、それは鉄兜団が遙か以前に先行して目覚めた「長子たること Erstgeburt」に由来するからだ、となる⁽¹⁹⁾。更に彼は次のように言う⁽²⁰⁾。

「我が故郷のナチスは皆、鉄兜団指導者層の活動を尊敬している。なぜなら、ヒルシュベルク・・・等の街頭や広場の多くを解放運動のために他の誰よりも自由にし、その際多くの犠牲を払ったのは鉄兜団であったから。鉄兜団にはサラリーマン指導者など存在しないのである。」

ここで留意すべきは、ナチズム運動の本格的登場以前に、鉄兜団が同じ民族共同体思想の担い手として、文字通りその「長子」として存続してきた点であろう。ここに同団のナチズム運動台頭におけるひとつの役割が示されているのではなからうか。後述するように、同団の反ユダヤ主義や社会ダーウィニズムの保持は、ナチズム運動を決して思想的に孤立した存在にはさせなかったのであった。と同時に、共同体思想に関しても、鉄兜団が固執した前線体験、塹壕共同体経験の有無は、戦後世代の拡がり下では、同団を民族共同体思想の担い手の「長子」とはしても唯一の担い手とすることは出来ない。類似の風貌をもつ運動体が用意されて、それがより広義の民族共同体思想を鼓吹すれば、それは言わば前線兵士の精神を引き継いだ「次子」となりうるであろう。ここに、反共暴力実践を核とする一種の「戦闘共同体」化を達成したSAのナチズム運動における存在意義のひとつが示されることになる。共和国後半期においては、

暴力闘争時に表出されるSA隊員の「心魂や勇氣」・同志的結合は、十分「民族共同体の範を示し」うるものであった。

このSAという鉄兜団に比肩しうる政治闘争団体が、ナチ党という政党的ファクターと結合しているというナチズム運動の政治運動上の特質は、鉄兜団がいかに政党政治を攻撃しようとも、ワイマルの議会制民主主義下では、ナチズム運動の優位を決定的なものにした。フォン・ジードが自らたてた問い「ゼルテかヒトラーか」に対し、ヒトラー以上に「自制的で虚心坦懐にして感受性豊かな」「できること以上の約束はしない」「粗野な熱狂に傾くことのない」ゼルテこそその答え、としつつも、結局最後には、「ゼルテもヒトラーも」と言わざるをえなかったもの⁽²¹⁾、このナチズム運動のナチ党を通しての議会への立脚に拠るものであろう。「(ナチ党と鉄兜団の粗野な)競合はまったく不要である。なぜなら、鉄兜団は決してナチ党の発展を妨げるものではないし、鉄兜団員は各自が魅きつけられた国民主義的政党に投票しうるからである。」とは、フォン・ジード自身の言葉である⁽²²⁾。となれば、選挙に際し、ナチ党以外には殆ど国家人民党くらいしか有力な選択肢がなくなる中で、せいぜい彼が言えるのは、以下のような科白ぐらいであろう⁽²³⁾。

「私には、ナチ党がいつの日か選挙で単独に絶対多数を保持しうるとは思えない、とりわけ、彼らが鉄兜団に対する(攻撃的)姿勢を改めない限りは。」「ヒトラーは選挙勝利に酔うことはできないのであって、選挙民の10%程度がナチズムとは何かを理解しているにすぎない。選挙民大衆の思考はまったくナチズム支持とは別物であって、人々は次のように言っているのである。すなわち、この13年我々は次第に泥濘に深くはまり、どんどん貧しくなった。今ナチ党が選ばれたのは、多分、それが我々にとってヨリましなものだからであろう、と。」

しかし、選挙とは畢竟「ヨリましなもの」に見える政党を選ぶことであって、少なくとも、「我々は政党ではないし、また悪意から繰り返し主張されるような国家人民党の護衛部隊でもない」とする鉄兜団には、「ヨリましなもの」になる可能性は皆無であった。フォン・ラメツァン＝シェーンモア男爵にしても、

「いかなる選挙においても、全政党がすべての人にあらゆることを約束し、客観的観察者が選挙プロパガンダに基づいては殆ど政党間の差異を認識しえない程である。あらゆる民主主義の本質は、政党に大衆を獲得するためのデマゴギーである。」

と議会制民主主義批判を繰り返しつつ、せいぜい、「我々鉄兜団は投票義務は果たそうとも、信ずるのは議会ではなく、来たるべきプロイセンの、兵士の、鉄兜団の秋である。」と、クーデター願望を匂わせるしかなかったのであった⁽²⁴⁾。

4. 「鉄兜団とナチ党」

最後に、この威迫的な科白をもって閉じられた男爵の講演内容の主たる部分を紹介しておくことにしたい。まずその冒頭部分から、鉄兜団が敵視したものを確認することができる⁽²⁵⁾。

「鉄兜団は最大の愛国的組織として、終戦以来、ドイツ民族・国土の破壊にむけて提携していたドイツ内外の敵と戦ってきた。不戦主義や唯物主義(=実利主義)精神との戦

い、ヴェルサイユの死の条約や議会議主義との戦い。団の敵は左翼政党やマルキストだけではなく、国民各層とりわけ、大衆化しないと、大衆組織の中に入らないと自らの勇気を見出せず、しかも自らの志操を商売に奉仕させんとする・・・市民層の不熱心さ、無気力が団の闘争を妨害した。」

次いで彼が論じるのは、先述の、社会主義概念にたいするマルクス主義的解釈への批判であり、社会主義とナショナリズムの等置である。そしてそこでは、「プロイセントゥームPreußentum」という概念が巧みに使用されながら、旧フロントケンパーの経験が接合されている。結果として鉄兜団の思想世界が鮮明にされる、なかなか見事な論述である。彼は言う⁽²⁶⁾。

「マルクスがその教義を樹立して以来・・・あらゆるドイツ人において、『社会主義』という用語の下に、反資本主義や唯物論やマルクス主義や『すべてを平等に』の如き諸々の概念が形成された点に疑いはない。戦後になって初めて、社会主義という用語は・・・特にファン・デン・ブルック M.van den Bruck の『第三帝国 Das Dritte Reich』とシュペングラー O.Spengler の『プロイセントゥームと社会主義 Preußentum und Sozialismus』を通して、別の意味を得た。」

「別の意味」とは何か。

「そこでは、社会主義という用語はあらゆる経済的物質的問題から完全に離れ、たとえば鉄兜団が主張するような身分制的国家の教義の如く・・・国家構築の意で理解される。社会主義はひとつの純粋に倫理的な概念になったのであり、そこでは、プロイセントゥームと社会主義が等置され、プロイセン＝ドイツ軍隊の構築とその業績の中に、ドイツ的社会主義の最高度の表現が見い出されるのである。社会主義とは、そこでは、プロイセン＝ドイツ的国家構築とプロイセン＝ドイツ的義務遂行のことなのである。」

では、その「プロイセン＝ドイツ的義務遂行」とは何か。

「それはカントの無上命令の教義において出てくるような、フリードリヒ大王の『朕は我が国家第一の下僕』との言葉に示されるような、あるいは単純に言うところの『一人は全体のために、全体は一人のために』の如きものである。とすれば、このような・・・社会主義概念は我々鉄兜団員が『ナショナリズム』という用語に結びつけている概念、すなわち、すべての前線兵士がそれを手本にして忠実に生きたところの概念、我が民族の最良の200万人がその生命を捧げたところの概念・理念と完全に重なり合う。そのような高度に倫理的に把握される社会主義に対し、『不労所得の禁止』やら『労働協約』やら『保険』の要求やらを織り込むことは許されないことである。」

ここで鮮明にされているのは、先にも述べたように、社会主義の意味内容の改変作業と民族共同体思想の提示によって、危機に瀕した国民統合を反マルクス主義的に回復せんとする意志ではなかろうか。そして、ポピュリズムの色彩の薄さを度外視すれば、以下に引用する言い回しに示されるように、鉄兜団は、上記の反マルクス主義に下記の反自由民主主義と武断主義を加えた意味での国民統合（・外交）を目指す“ファシズム運動”に、限りなく近い存在であったように筆者には思われるのである。

さて、その反自由民主主義的志向を反議会議主義という言葉で表しつつ、それに大战経験に由来する自らの存在価値を接合させて、講演は次のように続けられる⁽²⁷⁾。

「議会主義の方法でドイツの運命を変えんとする、そしてそのために大衆獲得に依存する政党というものには、鉄兜団のような・・・運動ほどには、社会主義的プロイセントゥームないしナショナリズムを純粹に主唱することはできない。議会主義とプロイセントゥームは相容れない対立項である。唯一の反議会主義的大運動としての鉄兜団がプロイセンにおいて兵士によって設立され・・・たことは偶然ではない。鉄兜団は、旧プロイセン＝ドイツ陸海軍所属の将校・兵士によって結成され、戦争体験を基に、何ら身分的差異を問わぬ・・・祖国をめぐる戦いにおける共闘者への誠実と戦友愛だけを存在させた統一体となった。鉄兜団は、このプロイセン的社会主義の伝統に根づいているのである。」

また、力による問題解決の最高形態である戦争に敗れ、しかし、自らの力によって共和制を設立せしめその国境を防衛したとの経験・自負をもつドイツの旧フロントケンパーにとって、武断主義はその思想の核でもある。男爵は次のように言う⁽²⁸⁾。

「鉄兜団は、戦時の前線精神から生まれた思想以上に偉大な理念も思想もない、と確信している。そして鉄兜団がこの最高の民族的価値の守護者としてある時・・・団はそれを、戦時ドイツ国民がそうであった如く、国防共同体 Wehrgemeinschaft のみが、闘争共同体 Kampfgemeinschaft のみが真の民族共同体 Volksgemeinschaft たりうる、との明確な自覚の下に為しているのである。」「プロイセントゥームないしプロイセン的社会主義は『ゲノッセ（同僚） Genosse』などという用語を承知しないところだが、鉄兜団もまた、社会民主党の語彙に発する『ゲノッセ（同僚）』の語を拒絶している。我々が団に結集しているのは、共に享受するためではなく共に戦うためである。死せる英霊たちと結合する橋梁はゲノッセンシャフトなどではありえず、カメラートシャフト（戦友関係）である。闘争共同体の本質はゲノッセンシャフトなどではなく、誠実とカメラートシャフトである。」

そして、この武断主義的意思表明に、フェルキッシュ（＝民族至上主義的）völkisch とは何かを問いながら男爵が接合するのが、社会ダーウィニズム的発想である。彼はまず、「ヒトラーが国民にフェルキッシュな思想を伝え、彼の支持者が仮借なきやり方でフェルキッシュな見地を前進せしめた功績を貶することはできない」とナチズム運動を評価しつつ、次のように続ける⁽²⁹⁾。

「広範な層の人々が、フェルキッシュであることを単に反セム主義的に解釈することに慣れ親しんできた。疑いなく、今日のドイツにおける対ユダヤ人敵視はフェルキッシュな運動のひとつの重要要素であるが、しかし、それは非建設的なネガティブな類のものである。フェルキッシュとは単に種の純化 Reinerhaltung を指すのではなく、種の維持 Erhaltungこそがフェルキッシュ思想の本質である。そして、この種の維持に各民族共同体は奉仕するのであり、国防共同体こそが生存競争のための共同体となる。」

文中に「非建設的でネガティブ」という言い回しがあるが、無論これは別に反セム主義を弾劾しているわけではない。フォン・ジードの冊子に、「鉄兜団指導者層はまったく素朴な自然感情から、ユダヤ人・フリーメーソン・イエズス会士の如き、自らの行動の決定基準をドイツ国境外の権力に求めるような超国家的勢力のすべてを拒絶する。」とあるように⁽³⁰⁾、鉄兜団もまた反ユダヤ主義的であった。さて、講演は次のように続けられる。

「神は被造物に対し生存競争を命ぜられたが、これは個体の維持のためではなくして種の維持のためのものである。・・・人間も自然の一部であり、神の意志に服さねばならない。民族共同体とは闘争共同体であるべきにもかかわらず、そこから、種の維持のための民族間生存競争に奉仕せず民族間の和解に尽力するような経済利害関係者集団を生成させてしまったことは、黒赤金の国家に下された天罰であろう。民族間の和解に尽力するような民族は当代世代に武力闘争を放棄させるが、戦いの放棄とは、次世代のために生存圏・生存可能性を創出することの放棄を意味するだけである。ある民族の宥和政策は、出生率が低下すれば、あるいは民族の将来を無にしたことによって、その民族の自滅をもたらすであろう。」

ヒトラーの『我が闘争』第4章や11章における社会ダーウィニズム的言辞を彷彿とさせるこの描写に続く男爵の結論は、無論、鉄兜団の存在価値を前面化したものになる。

「最高度にフェルキッシュな経験とは、武器をとっての生存競争たる戦争における英雄的犠牲のことである。成年男子は、子どもや子孫の生存圏・生存可能性を維持し闘い続けるために、あるいは民族の血と魂が減ぼされることのないように、その身を犠牲にする。鉄兜団は、この英雄的犠牲の見地に完全に立脚し、その誕生をこの前線経験に負っているがゆえに、ドイツが持ちうる倫理的に最もフェルキッシュな運動になっているのである。」

このように、鉄兜団のような成員数40万近くを数える大衆運動が、反ユダヤ主義や社会ダーウィニズムを自明のものとし、また武断主義的姿勢を鮮明にしていたことからすれば、ナチズム運動にも“過激”に見られたそれらは、ワイマルの人々にとって、文字通り「過激」ではあっても、決して“異常”ではなかったことが十分推測されるのである。ナチズム運動・思想への人々の懐疑・抵抗感を希薄化する、という役割も鉄兜団は果していたわけである。

なお、この後の男爵の講演は、上の社会ダーウィニズム的観点からキリスト教的隣人愛を家族愛に限定し、それを逸脱した時「隣人愛を人類愛と等置する」愚がもたらされる、とする。また、「いかなる両親も、任意あるいはすべての民族成員を自らの血を分けた子どもと同等には愛せないがゆえに、隣人愛は決して民族愛を意味しない」。したがって、民族愛を保全するためには、「自らの生を、子どもの生のために、闘争共同体に団結している家族の生のために投入する覚悟をもった共闘者への誠実」が必要であり、ここに、鉄兜団が主張する「前線時代に発する誠実と戦友愛の深い意味」が存する、とする。ところが、これを理解できず、「自分の血を分けた子どもをすべての同胞以上に愛したり面倒をみることはゆるされない、と信ずる者が国民社会主義の見地に向かう」のであり、その者は、「プロイセン的原理たる『各々にそれ相応のものを』を拒絶するに違いない」——このように男爵は説く⁽³¹⁾。そしてここから、本稿第1章で紹介したスターリンの「ロシア国民社会主義」に関する彼の解釈が語られることになるのである。

註

- (1) 拙稿「自立的政治闘争団体と政党政治（Ⅰ）～（Ⅳ）」『山口大学教育学部研究論叢』42～44, 47（1992～94, 97）
- (2) 拙稿「『政治闘争団体』とナチズム運動の台頭」『現代史研究』43（1997）、14頁
- (3) Nationalsozialist oder Stahlhelmann? Seldte oder Hitler? Eine Stimme der vordersten Front der nationalen Bewegung. [v.v.Sydow], Hirschberg 1931 (BA-Koblenz, Zsg.1, 88/6)
- (4) Stahlhelm u. NSDAP. Soldatentum oder Parlamentarismus. Minderheit oder Masse? [v.H.Freiherr v.Lamezan=Schönmoor], Jtzhoe 1932 (BA-Koblenz,Zsg.1,88/10)
- (5) 領域区と試したランデスフェアバントの下に幾つかの大管区Gau があり、大管区は管区 Kreis に分かれる。27年時点で、ランデスフェアバント及び独立大管区の数は計26個、大管区数は121個。フォン・ジードが指導する地区Bezirkは管区の下単位。紹介したメンバー数は以下に拠る。V.R.Berghahn, Der Stahlhelm, Bund der Frontsoldaten 1918-1935, Düsseldorf 1966, S.287
- (6) Flugblatt: Duesterbergs Politik, Halle [1932] (BA-Koblenz,Zsg.1, 88/10)
- (7) “Die Junge Nation”, Nr.11. [1932] (Ebd.)
- (8) Seldte oder Hitler?[v.Sydow], S.9
- (9) “Der Jungdeutsche”, Nr.73 v.27.3.1930
- (10) A.Mahraun, Der Aufbruch, Berlin 1929, S.15f.
- (11) Stahlhelm u. NSDAP.[v.Lamezan=Schönmoor], S.15
- (12) “Der Stahlhelm”, Nr.39 v.28.9.1930
- (13) Seldte oder Hitler?, S.7
- (14) Ebd., S.6
- (15) Ebd., S.6 u.13
- (16) Stahlhelm u. NSDAP, S.8
- (17) Seldte oder Hitler?, S.7
- (18) Ebd., S.8f.
- (19) Ebd., S.6
- (20) Ebd., S.12
- (21) Ebd., S.13f.
- (22) Ebd., S.5
- (23) Ebd., S.7 u.13
- (24) Stahlhelm u. NSDAP, S.16
- (25) Ebd., S.3
- (26) Ebd., S.9f. ちなみに、ナチ党No2 G.シュトラサーの次のような発言は、男爵の社会主義観と完全に一致する。「社会主義とは、各個人が全体の部分、深く結びつけられた部分であることを知っている真摯なプロイセン＝ドイツ的な『全体への奉仕』のことなのである。」（中村幹雄「グレゴール＝シュトラッサーにおける国民的社會主義」『研究年報〔奈